

アメリカ陥落7

正規軍反乱

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面
迷惑
星

安田忠幸

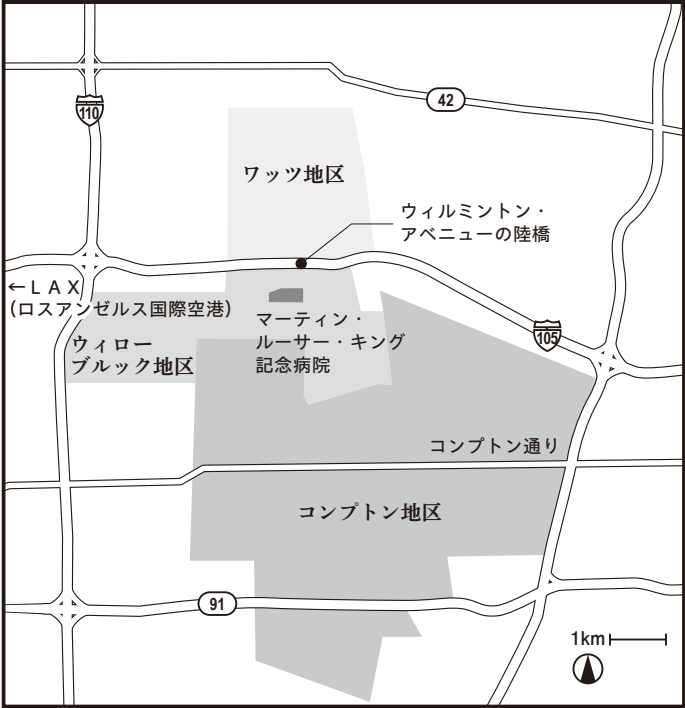
目次

プロローグ	13
第一章 増援部隊	21
第二章 雷神突撃隊	42
第三章 ビッグ・ブラザー	71
第四章 計算違い	98
第五章 蠢めく影	124
第六章 謀議	150
第七章 停戦	175
第八章 崩壊	200
エピローグ	216

アダック島北部



ロスアンゼルス
ウィローブルック地区周辺



登場人物紹介

////[日本]////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい
土門康平 陸将補。北米派遣統合司令官。コードネーム：デナリ。

《原田小隊》

はらだたくみ
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。原田小隊の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。田口と組むスポッター。コードネーム：ヤンバル。

《訓練小隊》

あまりひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。コードネーム：コブラ・アイス。

はなわびれい
花輪美麗 三曹。北京語遣い。コードネーム：タオ。

こまとりあや
駒鳥綾 三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

《水陸機動団》

しばひかる
司馬光 一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。

いむらしんのすけ
居村真之輔 陸将。防衛装備庁・長官官房装備官。

●航空自衛隊

・第308飛行隊（F-35 B戦闘機）

あぎたつお
阿木辰雄 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

みやせあかね
宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ。

●統合幕僚監部

みむらかなえ
三村香苗 一佐。統幕運用部付き。空自E-2C乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。

くらたよしき
倉田良樹 二佐。統幕運用部。海自出身。P-1乗り。

●在シアトル日本総領事館

土門^{どもん}恵理子^{えりこ} 二等書記官。

////【アメリカ】////

●エネルギー省

M・A（ミライ・アヤセ） 通称・魔術師^{ソニカラー} “ヴァイオレット”。Qクリ
アランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。

サイモン・ディアス 博士。エネルギー省技術主任。

●陸軍

〈第 160 特殊作戦航空連隊〉 “ナイト・ストーカーズ”
メイソン・バーデン 陸軍中佐。シェミア分遣隊隊長。

ベラ・ウエスト 陸軍中尉。副操縦士。

〈第 189 歩兵旅団第 358 連隊〉

サム・クルーソー 陸軍大佐。連隊長。

・第 2 大隊（機甲）

ソフィア・R・オキーフ 陸軍少佐。作戦参謀。

・ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン 元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデル
タ・フォースの一個中隊を率いていた。

●海軍

・アダック島施設管理隊

アクセル・ベイカー 海軍中佐。司令官。

・ネイビー・シールズ・チーム 7

イーライ・ハント 海軍中尉。

マシュー・ライス 上等兵曹（軍曹）。狙撃手。

●空軍

テリー・バスケス 空軍中佐。終末の日の指揮機^{ドゥームズデイ・ブレン} “イカロス” 指揮官。

スペンサー・キム 空軍中佐。NSA 基ってのスーパー・ハッカー。

●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。

●FBI

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課の新米プロファイラー。

ロン・ノックス 捜査官。サルベージ班。

●アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局（ATF）

ナンシー・パラトク 捜査官。イスラエル族。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。陸軍に二期在籍したマークスマン。

トシロー・アライ 元警部。ヘンリーの父親。

●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。

●テキサス・レンジャー

デビッド・シモンズ 陸軍中尉。テキサス州空挺兵OB。

〈“グリーン24”プラトーン〉

ドミニク・ジョーダン 軍曹。リーダー。通称“サージャント”。

●レジスタンス

ルーカス・ブランク 法学部政治哲学教授。公民権運動の闘士。

リリー・ジャクソン 元陸軍大尉。双発の小型プロペラ機パイパー・セミノール乗り。

サラ・ルイス 海兵隊予備役中尉。スカウト・スナイパー指導教官課程出身。

ケイレブ・ジャクソン 無線マニアの少年。

●“ナインティ・ナイン” = “セル”

フレッド・マイヤーズ 教授。“ミスター・バトラー”。

トーマス・マッケンジー グラディエーター 大佐。通称“剣闘士”トム。

●その他

にしやまじょういち 西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。

ちよまる 千代丸 穰一とソユンの息子。

ねぎしかける 根岸翔 スシ・レストランで働く学生バイト。

たしろてつや 田代哲也 西山の会社員時代の後輩。

ダニエル・パク 下院議員。カリフォルニア州の大統領選候補。

///【ロシア】///

●空挺軍

《第 83 親衛独立空中襲撃旅団》

ヨシーフ・ロマノフ 空挺軍少将。旅団長。

・第 598 独立空中襲撃大隊

ニコライ・ゲセフ 空挺軍大佐。大隊長。

パベル・テレジン 曹長。

・第 635 独立空中襲撃大隊

イーゴリ・ダチュク 空挺軍中佐。

アンドレイ・セドワ 空挺軍中佐。旅団参謀。

///【中国】///

●空挺軍

〈特殊空挺旅団“雷神”突撃隊〉

フオロン 火龍 空挺軍少将。旅団長。

チャンイーホー 鍾義和 大佐。大隊長。

スゥホンタァ 蘇宏大 空挺軍中佐。作戦参謀。

タンヤン 唐陽 大尉。旅団長副官兼通信兵。

リウジン 劉駿 中尉。

アメリカ陥落7

正規軍反乱

プロローグ

グリーン24^g プラトーンの車列は、ルイジアナ州軍のハンヴィーの先導を受けて、遂にミシシッピ河を渡った。ミシシッピ河の水面は赤茶けて酷く濁っていた。幅一キロの河を渡る時、ジョーイ・西山^{にしやま}こと、西山穰^{じやういち}一は、「こんな汚い河だったのか……」とぼやいた。

息子の千代丸^{ちよまる}が、後部座席のチャイルドシートから身を乗り出して、水面を見下ろしていた。10号線で橋を渡った先は、ルイジアナ州の州都バトンルージュだ。

いろいろあったキャンプ場を出発する前に、記憶を掘り起こし、探していた後輩が辿り着いた場

所をチーム・リーダーのドミニク・ジョーダン元海兵隊軍曹に伝えてあった。

携帯はあれ以降一度も繋がらなかったが、たぶんメールも届いただろうから、向こうがその場所から動くとは思えなかった。

橋を渡り切った先の左手に州の行政組織が集まるダウンタウンがある。都市圏人口は一〇〇万人近いが、街自体はダラスとは比べものにならない。小さな街だった。

10号線の右手には、すぐ戸建ての住宅街が広がっている。

「そんなに荒らされているようには見えないな

……」

西山はヒュンダイ・ソナタの助手席で言った。昨夜はほぼ徹夜状態だった。徹夜で戦った。すりこぎをただの棍棒として戦ったのだ。ハンドルは妻のソユン・キムが握っていた。

「略奪はとくに終わった後でしょう。州軍も、ダウンタウン程度の治安は維持したでしょうから、この辺りは静かだったんじゃないの？ 橋の手前は結構酷かったわよ。あちこち路上に死体も転がったままだったじゃない」

今朝方、壮絶な銃撃戦に巻き込まれた。西山の手の甲には、その時のガン・パウダーがこびり付いたまままだ。一瞬うとうとしかけたが、頭の中で銃声（ぶちだま）が弔し、はっと眼が覚めた。人は殺さなかつたつもりだ。自分が撃った弾は、たぶん誰にも当たっていない。

剣道の経験を活かし、すりこぎで賊を倒した。

それなりに活躍した。包囲状態にあったあのキャンプ場を脱出することに一番貢献したのは、西山のすりこぎだった。

今は、テキサス州からの支援物資を搭載したコンボイがバトンルージュに入っている。一時間置きにそのコンボイが到着するから、ルート上の安全を絶対に確保せよ！ とテキサス州政府からの厳しい命令が届いていた。隣の州への、有無を言わせない命令だった。

今日は、バトンルージュ止まりだが、ルート上が安全だと信じられたら、明日はバトンルージュ経由で、南のニューオリンズまで支援物資を届けやう、とのメッセージが届けられていた。

ニューオリンズは、バトンルージュを超えるルイジアナ州最大の都市だ、そう言われては、州政府としても必死にルートの安全を確保するしかない。

緩やかなカーブを南へと曲がる。ここから一三〇キロでニューオリンズだ。ファミレス街に入ると、左手にはウォルマートの看板が見えてくる。隊列は下道へと降りて進んだ。

西山は、ようやく記憶の糸をたぐり寄せた。そうだ！　ここだ……。商売としてはそんなに大きくは無かったが、確かにここに何度か営業で来た。州軍のハンヴィーが、左手に食品加工工場の看板を見付けると駐車場へ左折した。彼らのエスコートはここまでという約束だった。

まず州兵が付近の安全を確認する。建物の中から、両手を掲げた日本人が出て来て挨拶した。探していた田代哲也^{たしろてつや}だった。西山とは歳は少し離れていたが、英語が達者で、度胸と押ししの西山とは良いコンビだった。若くに結婚したせいで、子供はもう大きかった。

州軍のハンヴィーは、ガソリンが入った燃料缶を

降ろすと走り去っていった。

西山も車をつつ込ませ、銃痕をダクトテープで塞いだドアを開けて降りると、「ちよっと待ってくれ！」と後輩に告げてから、通りに戻った。

チーム・リーダーのジョーダン氏が、路肩に止めた車から降りてくると、満面の笑顔で西山を一瞬抱きしめた。

「寂しくなるよ！」

「みんなを、無事に、目的地に送り届けてくれ！」

「なんだ、サムライ！　英語が出来るじゃないか？」

「サージャントの南部訛りは酷いぞ。全くわからない」

「この騒動が終わったら、みんなでサムライのレストランに行くよ。スシ・パーティを開こう！」
「もちろんだ！　待っている。ここから何マイル？」

「そうだな。まだ千マイルという所だな。運が良ければ、明日の夜、マイアミだ。そうはいかないだろうがな。いちおう、例の携帯基地局機能を持つドローンを、時々上に飛ばしてくれるよう要請はしてある」

「何言っているかわからない！ とにかく、無事を祈っているよ」

「一つ、警告だ。テキサス・レンジャーを信じるな。彼らは危険だ」

「わかってる。俺たち、罠にされた。デコイ、ルアー……」

「そうだ」

二人は一瞬固い表情になったが、すぐ笑顔に戻り、最後に握手を交わした。隊列を組む様々な人種、国籍、年齢性別の仲間たちの車を一台一台覗き込んで、西山は手を振って見送った。

彼は、この小隊のヒーローだった。無口な日本

人コックとして参加した西山は、いまやみんなの英雄だった。

車列が走り去り、10号線へと戻っていくと、辺りは静かになった。走っている車はいないわけではないが、車が走ってくるとどうしても身構えてしまう。建物の中から、武装した男たちが出て来て周囲を威圧し始めた。アサルトを持った者までいるが、全員がアジア系だった。髪型も短く整い、いかにもビジネスマンという感じだった。

「田代！ 無事で何よりだ！」

「先輩こそ、本当に来たんですか？ てつきり州境までだと思っていた」

「いやあ、そのプリウスでも、テキサスは遠いと思ってな。何キロだっけ？」

「ここまで、一六〇〇キロくらい走ったかな。マイアミからは遠いですよ」

「千キロくらいじゃなかったか？」

「海の上をまっすぐメジャーを引っ張っても一〇〇キロはあります。幸い、途中で一回給油できたから、どうにかここまで辿り着けたが、途中で一台捨てました。皆さんは、一緒に脱出したご近所さんです。韓国人に、台湾人にシンガポールの御家族も」

「なんで帰国しなかった。会社からは帰国命令が出ていただろう？」

「いろいろあつて。その車、何ですか？ そのダクトテープ、銃痕ですよね？」

「ああ、まあおいおい話してやるよ」

「四駆はどうしたんですか？ これ奥さんの車でしょう？」

「竜巻でひっくり返った。家ごとな。もう十日くらい経つかない」

「家ごと？ どういう意味です」

「だからさ、家が吹き飛んだわけよ。瓦礫はまだ

そのままだ」

田代は、わけがわからないと眼をぱくりさせた。

「まだローンが始まったばかりの家が吹き飛んだのに、先輩は、俺を迎えに危険を冒して、こんな所まで車を飛ばしてきたんですか？ お子さんまで連れて……」

「そうだ。だって家にいたって屋根もないんだぞ」

「この人、そういう男だって知っているでしょ？」

と車から降りてきたソユンが呆れ顔で言った。

「奥さん！ なんで止めなかったんですか？」

建物の中から、家族が出て来た。ソユンは、田代夫人と再会を喜んで抱きしめてやったが、奥方はえんえんと泣き出した。小学生の娘さんが二人いた。

「さすがに、俺もここまで治安が悪化するとは思わなかったけど。テキサスは平和そのものだ。腹は減ってないか？ エナジーバーの類いなら腐るほどあるぞ。水もある」

「それ下さい！ 昨日でもう食い物も尽きたんです。みんなで分け合って食べていたので」

「勝手に取ってくれ。燃料をまず車に入れよう。ちよつとずつで良い。ほんの一〇キロも走る程度で構わない。これさ、一斗缶の大きさは無いよね。でも心配は要らない、テキサスからのコンボイが、一時間置きにバトンルージュまで入る。そのどれかの帰りの隊列に加わることで、燃料は分けてもらえることになっている。テキサス州境まで四〇〇キロ近いか。どうせノロノロ運転だ。明るい時間帯にテキサスまで辿り着くには、なるべく早い時間帯のコンボイに合流する必要があるぞ」

「ソユンさん、韓国人ファミリーを紹介します」

三組。石油会社に、旅行代理店に、自動車販売店」
「あたしの言葉、酷いわよ。二世三世から教わった言葉だから。日本人てことにしちゃ駄目？ あの人たち、英語は流ちょうでしょう？ 奥方も」
「駄目です。もう喋っちゃいました！ 奥さんは韓国人だと」

ソユンは仕方無く、韓国人ファミリーの輪に入り、これからの段取りを朝鮮語と英語のちゃんぽんで説明した。

田代は、娘たちにエナジーバーを与えながら、改めて西山に向き直り、腰を九〇度曲げて深々とお辞儀した。

「有り難うございます！——。まさかそんな状況だとは知らずに……」

感極まった声で、涙が光っていた。

「おいおい泣くな！ 俺とお前は、営業の最前線で北米大陸を渡り歩いたんだぞ。互いに命を預け

た仲じゃないか。そこが地獄だろうと、助けに来るのは当たり前だ！ しかし、フロリダはそんなに酷かったのか？」

「何しろ、あの暑さで電気が止まって、まず冷蔵庫が殺られました。スーパ―は半日で打ち壊し状態です。ある程度、備蓄はしたつもりだったが、停電までは想定外でした。渋滞が始まる前に脱出しそこねたので、ご近所でコンボイを組んで走ろうということになって……。こういう時、韓国人は頼りになります。徴兵経験者なので。韓国車に乗ったアジア人を見ると、アメリカ人は襲ってこない」

ソユンと韓国人避難者家族とのちよつと長い自己紹介が終わる間に、ガソリン缶を空^{から}にできた。たぶん、一番燃費が悪い車でも、西山らがドツボに嵌まった湿地帯を抜けて、西隣のラファイエットまでは辿り着けるだろう。

七台の車を連ねて、慎重に出発した。韓国家族が乗る韓国車の内二台は、奥方が運転していた。父親は助手席から、アサルト・ライフルの銃口を出して周囲に睨みを利かせていた。そして残る一台で、後部座席に乗った父親が、歩道側を警戒していた。

大統領選を巡る各州大陪審判決を受けて、左右の対立は暴動へと発展していた。全国で電気が止まり、それを引き金に全てのライフラインが止まった。暴動は半日で打ち壊しへと発展し、ロシア兵工作部隊による全土での停電も重なり、全米の流通網は翌日には完全に麻痺した。

ワシントンDCでは、催涙弾が飛び交い、ホワイトハウスの大統領は、地下の軍事司令部に立て籠もり、外は、英国軍海兵隊によって守られていた。対立は米軍内部まで持ち込まれ、軍は出動を

禁じられた。

そして、国内の治安維持には、たまたま米国内で演習や訓練に当たっていた同盟国軍部隊に委ねられた。自衛隊もその一つで、彼らは、北西部のワシントン州の治安維持に当たり、そこからカリフォルニアに飛びロスアンゼルス空港を奪還、さらにはまたシアトルに戻って、治安回復に当たっていた。

アメリカ北西部の治安をまず回復し、太平洋諸国から支援物資を空路で入れて、支援の輪を徐々に内陸部へ、さらには東部へと届けて民心を安定させようという作戦だった。

韓国軍部隊も到着し、作戦はほぼ順調に進行していたが、アリューシャン列島では、シベリア奪還をスローガンとするロシア軍部隊が鳴動し、米軍部隊が駐留し、自衛隊も中継基地として利用しているアダック島に、占領部隊を送り込んできた。

その動きに、アメリカ軍はほとんど為す術も無かった。

実働部隊として、ほんの数名のネイビー・シーلز隊員を乗せたMH・60Mブラックホーク・ヘリ一機しか派遣できなかった。そのアダック島の防衛も、自衛隊に委ねられていた。

第一章 増援部隊

アリユーシャン列島のほぼ中央に浮かぶアダック島は、真夏の短い夜を終え、夜明けを迎えていた。アラスカのアンカレッジまではおよそ二〇〇〇キロ、北海道までは、真っ直ぐ飛んでも三〇〇〇キロを超える。弓型に浮かぶアリユーシャン列島沿いには、隣にシエミア基地もあれば、住民が暮らす島もあったが、いずれにせよ孤島だった。首飾りのような孤島の繋がりが、アリユーシャン列島だ。

アメリカ全土で暴動が発生し、全てのライフラインが止まった後、自衛隊はまずワシントン州やキマで訓練中だった水陸機動団を出動させ、暴動

の鎮圧に当たった。同時に、西海岸に接近していた中国海軍の空母機動部隊を牽制するため、急遽ハワイ方面で訓練中だった護衛艦部隊にも出動を命じた。日中艦隊は、互いに搭載している戦闘機を発進させて鞘当てを続け、互いに軍艦を沈められながら鏖迫り合いを続けた。

海上自衛隊も航空自衛隊も、それらの作戦を支援するため、日本本土から、ありとあらゆる作戦用航空機を発進させた。

ここアダック島は、それらの燃料補給の中継基地になった。ロシアのウクライナ侵攻を受けて、米海軍は閉鎖状態の基地を再開し、小規模な施設

部隊を置いていた。

ロシア軍は、まず空挺部隊をアダック島に降ろしてきた。間一髪、陸自特殊作戦群部隊が間に合い、飛行場の襲撃は失敗した。数度にわたって攻撃を仕掛けてきたが、ロシア軍はその度に兵力を減らす結果に終わった。特殊作戦群、米陸軍元デルタ・フォースからなる民間軍事会社の傭兵部隊、そしてネイビー・シールズが乗るブラックホーク・ヘリが、つねにギリギリの所で持ち堪え、敵を撃退した。

ロシア軍は、ウクライナ侵略でも使ったキンジヤール・ミサイルを発射してまで支援を試みたが、それも航空自衛隊の戦闘機によって撃退された。

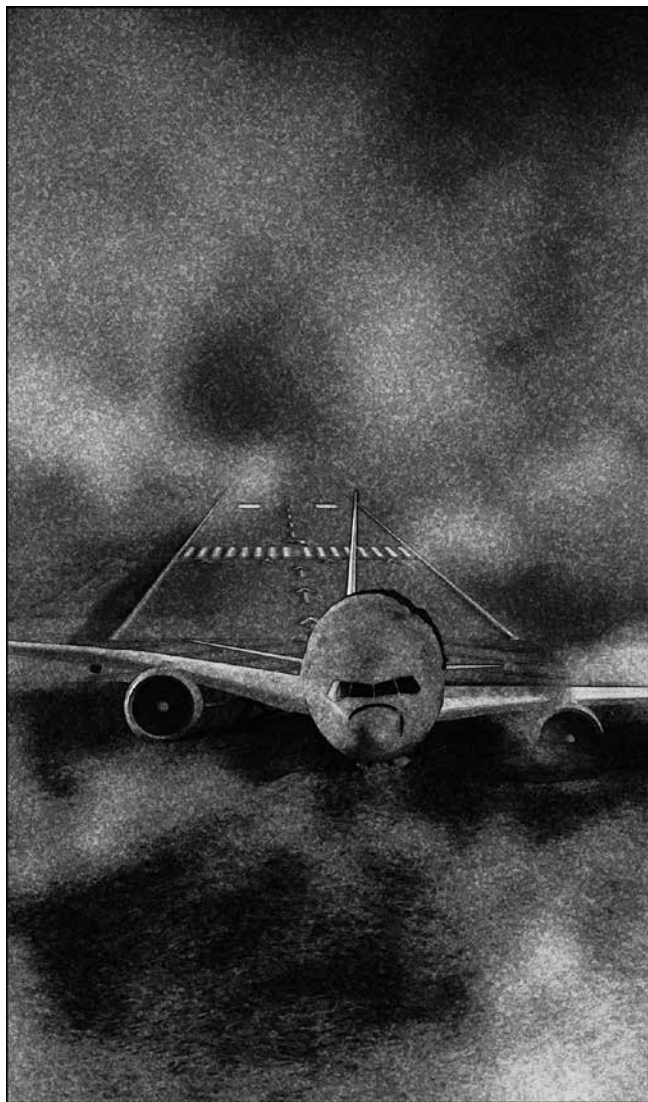
だが、決着が付いたわけではなかった。その状況でも、ロシア軍の戦力、兵力の方が上回り、しかもロシア軍は、ウクライナの戦場で鍛えられていた。

そして、夜明けと同時に、カムチャッカ半島を横断して二機の民航機が突っ込んできた。航空自衛隊の戦闘機が、それをインターセプトしたが、外見はあくまでも民航機なので、撃墜は見送るしかなかった。

一機は、飛行場の滑走路に突っ込んできてオーバーランし、丘に乗り上げる形で停止した。もう一機は、飛行場がある町から離れた、大戦中の飛行艇運用滑走路跡に強行着陸して止まった。いずれも火が出ることはなく、乗っていた兵士たちは全員が無傷で地上に降り立つことが出来た。

事前に、そういう方法で兵隊を送り込まれたら撃墜はできないだろう、という想定はしていたが、日米側にとつては、拙い事態だった。

アダック島飛行場の海岸側に、いかにも昔風の兵舎跡があった。そこに陸上自衛隊特殊作戦群、第四〇三本部管理中隊、その実、特殊作戦群隷下



の特殊部隊、サイレント・コアの指揮所が設けられていた。最初、原田小隊がC・2輸送機で乗り込み、続いて、訓練小隊が空挺降下で降りてきた。

部隊の指揮を取るのには、水陸機動団格闘技教官にして、北京語講師の司馬光一佐だった。彼女が、アダック島派遣部隊司令官の肩書きでその場にあった。

本来の米海軍司令部は、プレハブ建て屋がエプロン横に建っていたが、ロシア軍の迫撃弾攻撃で屋根に穴が開き、負傷者も出したことで、今は全員が、くの字型に建てられたこの兵舎跡に陣取っていた。

海軍部隊は、何しろ施設管理と降りてくる航空機への燃料補給が仕事なので、銃のマガジンの交換すら手間取る兵士ばかりだった。

素人による同士撃ちの危険があったので、彼ら

には、命じた時しか銃を構えるな、引き金に指を触れさせるな、撃つな！と厳命されていた。

アダック島施設管理隊司令官のアクセル・ベーカー海軍中佐は、上空一〇〇〇フィートから見下ろしてくるスキャン・イーグルの監視画像を見ていた。

今は二機が飛んでいる。一機は、北側に降りたというか、不時着したロシアの民航機を、もう一機は、この滑走路を突っ走って丘に突っ込んだ中国の民航機を見張っている。どちらも、離陸した場所はわかっている。

中国国内から離陸した民航機に、ロシア兵が乗っている可能性は低いと思われた。

ロシア機からは、兵士達が隊列を作って降り、走り出した。鮮やかな展開だった。決して一箇所に留まらず、群れを作らず、常に散開して前進し

ている。ウクライナで得た教訓だろう。ドローンを飛ばし始めたのもわかった。

あのワイドボディ機だと、三〇〇人は乗っているだろう。現に、スキャン・イーグルは、それら兵士を個人識別し、頭数をカウントして遣^ましていった。三三五名と出ていた。機体はエアバスのA330型機だ。ほぼ目一杯兵隊を運んできた。

対する中国は、ボーイングの777型機だ。こちらの機体サイズは、ぞつとする。乗せようと思えば、四〇〇人は乗る。ざっくり二個歩兵中隊というところだ。

ベイカー中佐は、自衛隊側が立ち上げた指揮所で、23インチ・モニターを屈み込むように覗き込んだ。

「オートバイじゃない。熱反応が少ない所を見ると、これは電動バイクだな。軽くて、たぶん折りたためるタイプだ……」

二台の電動バイクに乗った斥候が、東側のクラム・ラグーン沿いに走るヒルサイド・ブルーバードを南へと走ってくる。

すでに、エルフィン・フォレストの近くまで来ていた。ここアダック島で、唯一自然の森がある場所だ。そこだけ木が生えていた。33本の木が生えている。アメリカ最小の国立森林公園として知られている場所だった。

元は大戦中、この孤島に派遣された六〇〇名の不運な兵士たちを元気づけるために、時の司令官が植林を始めて育った森だった。

飛行場の西側は、まだ霧に覆われており、もう一機の動向はわからない。

「あちら側は、完全にロシア軍空挺の占領エリアだ。部隊合流を阻むことは出来ない」

「そうですね。われわれに出来ることはありません
ん」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。